裸で健康推進

及川裸観

及川裸観は、健康第一と、裸運動の普及に尽くした人である。その業績は「ラカンのあとにラカンなし」と言われ、

一　広く大衆の健康と幸せを願って貢献した人

二　敬老会の慰問に一万回、学校など行脚激励に二十五万箇所、講話十万回を果たした人

三　政治活動・宗教活動などに加担せず、「無一物中無益蔵」と純粋に、利得ぬきで世のため人のために挺身した人

四　大衆に敬愛され、幼児・青少年にも親愛された人などと称讃される。

一九〇一年（明治三十四年）、十二月十一日、及川裸観は、前沢町古城中田（現・奥州市前沢区）に生まれる。裸観の生家は町境の川近くの貧しい農家でした。両親は、多くの田畑を持つ財産家の長屋に住み、その家の農業手伝い人でした。昔は、百姓をする人が多かったのですが、百姓の第一条件は丈夫な体でした。裸観は、小さい頃から病気がちであり、両親はとても心配する毎日であった。一方、裸観の家は相撲の力士の生家であり、時折、力士が帰ってくると、褌一本で四股を踏んだり、庭の立木に汗を流しながら突きの練習をしていた。裸観は、力士のように強くなりたいという思いから、いつの間にか裸で外に出るようになる。『全身顔にせよ。』という上半身裸で半ズボンという裸観のスタイルは、その後生涯を通し続けられた。少年時代は、厚着をしたり、炬燵にもぐり込むことがたびたびあり叱られたりしたようですが、両親は人並みの健康体にさせたいと、井戸端に連れ出し冷水をかけたこともあり、子育てに真剣でした。

一九一一年（明治四十四年）、小学校五年の時、家計に窮し、網走で農業を営む母方の兄を頼って一家で北海道へ渡る。そして、開拓者として荒野の開墾に明け暮れ、農閑期は網走港で魚市場の手伝いをするという年間サイクルとなり、体はもちろん意志も強い人に成長する。

一九一八年（大正七年）、裸観が、十八歳の時に二歳年下の森よ志と結婚する。

一九二三年（大正十二年）、裸観が、二十三歳の時、小大砲（元十両）の助言で上京し、高橋繁治より自彊術を習った。自分の体に自

信を持ち、働けるようになった裸観は、そこで自分の健康法を広め、病弱で苦しむ人々に教え広めたいと思うようになる。

一九二八年（昭和三年）、二十八歳の時に、東京日々新聞（現毎日新聞）の配達を始めました。『ニコニコ体操』『全身顔にせよ』のたすきをかけて上半身裸で朝夕配達し、健康の大切さを訴える。

大都会での二、三年は予想以上の辛さでした。裸観の新聞は、毎朝時報のように決まった時刻の配達、明朗で礼儀正しい挨拶は町々の評判となり、健康体操指導の要請も増える。みんなにほめられ感謝されるようになる。

一九三一年（昭和六年）、三十一歳で、指圧師として生計を立て始め、初めて故郷前沢に帰郷する。

一九三五年（昭和十年）、三十五歳の時、「笑いは健康の泉・薄着は健康の源」をモットーに全国行脚を始める。

一九三七年（昭和十二年）、三十七歳の時、網走で氷中水泳を始める。以後、オホーツク海・網走川を泳ぐことが、恒例行事となる。

一九四二年（昭和十七年）、牧野元次郎（不動銀行頭取）より日暮里道場を寄贈された。（土地三百坪・家屋）裸観四十一歳の時でした。

このように、裸観の薄着、体操の普及活動の援助、後援費用を申し出る個人や団体があった。

裸観は、全国健康普及会長を務め、『ニコニコ裸で三十年』を財団法人・健康普及会より発刊しました。『健康の太陽』、さらに『健康の太陽』二号発行する。その中で、このような文面を書いている。

「平和に捧げた二児

二十歳の時、双子が生まれた。（中略）二人とも海軍へ行ったのだが戦争の最中、突如二人の戦死の報せがあった。長男清一は、宇治丸という運送船で玉砕、次男慶二はフィリピン航空隊整備兵で、爆弾をあびて吹き飛んでしまったという通知。そして終戦間際、二人の英霊は、同じ日に裸観の両手に抱かれて家に帰った。同じ日に生まれ、同じ年共に死んで今親元に帰る。（中略）しかし、清一も慶二も国家、世界の平和に捧げた尊い命、その純粋さを想う時、私は裸一貫、無我無私をもって、国家・社会の明朗・健康・平和のために、命奉じて止まず、という誓いを立てたのです。そして子供を無くしたことの嘆き悲しみで自分自身が死んでしまったら、それこそ元も子もない。今こそ自分は厳然として何処までも、尊い人生を生きぬき、全国青少年のために、限りない光となるべきであると、大いに決意したのであります（中略）」

年老いてからも、裸で全国を回り、裸運動の普及に尽力する。

一九七一年（昭和四六年）、七一歳の時、『ハダカで勝負―現代を生き抜くための金言集』日刊スポーツ出版社より発刊する。老人大学で町から記念のザブトンを贈られる。一九七五年（昭和五十年）、七五歳で、第十回東京キワニス社会公益賞（社会のノーベル賞と言われる）を受賞する。八十二歳になってもなお、学校や会社、役所を訪問し、自分の生い立ちを紹介し、体が弱かった自分を鍛えるために、小学校の時から裸でいたことや、何でも食べるようにしたことを話して回る。柔軟体操や、裸観特別の床上運動などをして見せたのですが、年齢を感じさせない、息をのむような早い運動の連続に拍手がわき起こる。

晩年には、郷土前沢の後輩のために在京町友会役員などを務める。年老いて功成っても、若い時のご恩は決して忘れることなく、前沢では裸運動の共鳴者との元朝裸参りをする。

一九八八年（昭和六十三年）十一月二十二日正午、東京都三河島関川病院にて、脳梗塞のため死去する。八十八歳でした。

極寒の網走氷像前

第十回
キワニス社会公益賞
及川ラカン殿
杉浦敏介
キワニスインターナショナル
東京キワニスクラブ
昭和五十一年一月十六日

キワニス社会公益賞

＊参考文献

『全身顔にせよ　及川ラカン』　千田　一彦　編集

『郷土の発展に尽くした　胆沢・江刺の先人物語』　胆沢・江刺の先人物語